

大英図書館所蔵の五山版『禪源諸詮集都序』について

石 井 修 道

この論文と密接な関係があるので、六月一日の学会発表当日に調査予告をしていた高山寺所蔵になる南宋版の『禪源諸詮集都序』の報告からまず始めたい。七月一四・一五日に高山寺の特別許可を得て、南宋版を拝覧することができた。

この版の存在については、常盤大定著『支那仏教の研究 第三』（春秋社、昭和一八年一月）所収の「宋代に於ける華嚴教學興隆の縁由（高山寺所蔵の宋版章疏、附、写本及欠本の調査に基づく）」の中で、書名のみが知られていた。その後、高山寺典籍文書総合調査団編『高山寺経蔵典籍文書目録第二』（高山寺資料叢書）第五冊、東京大学出版会、一九七五年）の「高山寺聖経類第四部第四五函二八号」に次のように報告されている。

禪源諸詮都序叙卷上下（宋版）二帖

〔1〕 卷上 ○南宋時代刊、折本装、〔高山寺〕朱印、天地横界、一頁六行、一行十三字、版心記継目ニアリ、無点、

〔2〕 卷下 ○体裁等〔1〕ニ同シ、中尾欠、但シ〔高山寺〕朱印ノ上ニ「行海」单廓朱方印ヲ重ネタリ、版心記継目ニアリ、無点、原表紙、（同書二九二頁）

このように、書誌的には報告済みであるから、その点では付け加えることはない。大きさを述べるならば、縦三〇、七センチ、横一一センチの大きな文字の南宋版の折本であり、上下巻共に天地界内は約二四センチで刻字されている。問題は下巻の欠けた内容と分量であり、特に今回の発表で問題にしたい、「浄染十重図」（後に紹介する宗密の本文からの仮称）が存在するかどうかである。残念ながら、巻下は一丈五折で最初の四丈しか存在せず、五丈以下すべて欠丈のため、「浄染十重図」はもちろん、刊記等も全く不明である。高山寺の南宋版は天下の孤本であるので、この結果、南宋版の「浄染十重図」は、現在ではいかなる内容であったかは完全に不明となった。実は上巻も完本ではなく、一一丈から一六丈を欠いている。確かめることは、現存部分の内の裴休の序文と

『都序』の本文は、朝鮮本（弘治六年本や万曆四年本）とほぼ同一ということである。朝鮮本は宋版の刊記が存在することから、宋版を復刻したことが推定されているが、その宋版に相当するものと高山寺の南宋版は同一系統の版ということができると推定される。このことが解明されたことは、今回の調査の最も重要な成果である。

以上、高山寺の南宋版から知られる書誌的な問題を踏まえ、今回紹介する五山版について言及してみよう。

そもそも、従来の『禪源諸詮集都序』に関する主なテキストの研究は、大きく五つあげることができる。

- ① 宇井伯寿『禪源諸詮集都序』（岩波文庫、一九三九年）
- ② 川瀬一馬『五山版の研究』（日本古書籍商協会、一九七〇年）
- ③ 鎌田茂雄『禪源諸詮集都序』（筑摩書房、一九七一年）
- ④ 冉雲華「禪源諸詮集都序―最早印本の発現和証実」（『東方雜誌』復刊第八卷第二期所収、後に『中国仏教文化研究論集』に転載、東初出版社、一九九〇年）
- ⑤ 田中良昭『禪源諸詮集都序』（『敦煌禅宗文献の研究』所収、大東出版社、一九八三年）

すなわち、①は宇井氏が一九三九年に明藏本を底本として岩波文庫より訳注を出版したものである。明藏本は、続藏経や大正藏経の底本として最も流布したものであり、その中に田原本が校訂に使用されていることも注目すべきことで、五

山版との関係は後に明確になる。今回、問題にする五山版については、②において、川瀬一馬氏が三井家旧蔵の五山版を紹介したのが最初で、刊記（題跋）と巻首の二葉の写真が紹介されている。しかし、残念ながら、現在、その五山版の所在は不明で、容易に拝覧することはできない。③は朝鮮本の万曆四年版を底本にした鎌田氏の訓注本である。その後、当時、カナダのマクマスター大学の冉雲華氏が、今回問題にする大英博物館に所蔵されていた五山版を紹介した。その五山版は、川瀬氏が紹介した三井家旧蔵の五山版ではなく、元来、天海蔵のものであった。その所蔵の経緯については、冉雲華氏の④の論文に詳しい。ただ、明藏本が四巻であるのに対して、宋版系が二巻である点については触れられてはいるが、後に紹介するような田原本との密接な関係等は言及されてはいない。五山版について付け加えるならば、黒田亮氏は、『禪源諸詮集都序に就いて』（『朝鮮旧書考』所収、岩波書店、一九四〇年）の中で、五山版の写本を所持したと述べ、田原本と五山版の密接な関係、及び朝鮮本の万曆四年本が宋版の原形を伝えていることを推定している。⑤は田中氏が台湾国立中央図書館蔵の敦煌文献を紹介したものであるが、残存部分が「浄染十重図」を含む影印十葉の興味深い断巻である。

目下、筆者は課外ゼミの成果を小川隆氏と共同で、五山版を底本として、『禪源諸詮集都序』の訳注研究（一）（二）「

〔駒沢大学仏教学部研究紀要〕第五二・五三号、一九九四・一九九五年〕を発表している。その研究途上、五山版を調査する必要にせまられ、駒沢大学の研究員のモルテン・シュルツター氏を通じて、大英図書館所蔵の五山版のマイクロフィルムを入手することができた。

実際入手してみると、五山版と田原本とは、「丁数」も「字数」も「行数」も全く同じものであることが判明した。ただ、田原本は五山版とは異なって「返り点」や「送りがな」や異本校合があつて、五山版の「かぶせ彫り」ではない。しかし、わずかな誤刻を除いては、五山版と同じ系統の版と言つてよい。ここでいう田原本とは、京都田原仁左衛門刊行（駒沢大学図書館二二二二）のものをさす。田原本と同じ形態のものに、京都平野屋佐兵衛刊行本と無刊記本の二種類（駒沢大学図書館二二二二・三、二二二二・四）もあり、後者には巻上の末尾に嘉元乙巳歳（一二三〇五）閏十一月上弦 受松谷慧律師命南蘭敬誌の識語があつて今後に検討する必要がある。川瀬一馬氏の『五山版の研究』二九八頁によれば、田原仁左衛門は『夾註輔教編』の五山版を寛永一九年（一六四二）に覆刻しているので、『都序』の覆刻も同様になされたものと考えてよいであろう。川瀬氏が同書に『禅源諸詮集』の五山版の無刊記の覆刻を指摘するのは、田原本を含めて理解してよいのかもしれない。なお、細かいことを言えば、大英図書館

館の五山版は、下巻の末尾の七丁は補写である。

ところで、田原本の開版の時、五山版の春屋妙葩の題跋を削除した為に田原本と五山版の関係が知られ難くなつてゐた。ただ、題跋の削除があつたものの、田原本が五山版と同一であることは、既に研究上からは指摘されていたことがらであつた。

すなわち、黒田亮氏は、「田原本は妙葩刊行の五山版に依つたのではないだろうか」（前掲書二二七頁）と言つてゐる。また、先に述べるように、川瀬氏はその著『五山版の研究』に三井家旧蔵本の刊記（題跋）と巻首の一葉を影印で紹介しているが、それを田原本と比較すれば、同系統であることは、推測できたはずである。このように五山版が田原本と同じ系統であることが判明すれば、既に宇井氏の岩波文庫では、明蔵本と田原本の校訂を行つてゐるので、結果的には、五山版は何等目新しいことはない。つまり、五山版と田原本の関係についての書誌学的問題は従来の研究で解決済みと言えよう。もし問題が残るとすれば、五山版と宋版の関係がある。五山版は、南宋版を知つてゐることが判明するので、同じ宋版といつても幾種類かを想定する必要があるであろう。今のところ筆者は五山版も宋版を承けるものと考えており、高山寺の南宋版とは別系統と推測している。この件については今後の問題としておきたい。

以上のように五山版と田原本が同一系統とすれば、『都序』は、大きく朝鮮本（≡南宋版）と五山版（≡田原本）と明蔵本の三種類が考えられる。この三種類の關係は、どのように考えられてきたであろうか。この件に関して、明蔵本と万暦版との相違を詳しく研究した論考が、鎌田氏の『宗密教学の思想史的研究』（東京大学出版会、一九七五年）に収められている。その中に、「宋版後記を有する万暦本および弘治本が、明蔵本と著しく相違している点は、裴休の序と『起信論』にもとづく迷いの十重と悟りの十重との図であるといえよう」（二四四頁）と述べる。さらに今紹介した五山版との相違を加えると、鎌田氏の「一四」段に当たるところに、字井氏も指摘するよう田原本（≡五山版）のみ四百六十四字があるのは大きな相違である。ただ、ここでは、裴休の序とこの「四百六十四字」の相違は、筆者等の訳注研究に述べているので、それに譲りたい。

そこで問題が残るのは、「淨染十重図」の相違である。確かに朝鮮本と五山版と明蔵本の三種の「淨染十重図」は、相違がある。

ところで、宗密が「淨染十重図」を表す理由は、何であつたであろうか。

今、之れを画いて図と為すは、凡聖の本末、大蔵の経宗をして、一時に心鏡に現せしめん。此の図の頭は中間に在りて、衆生心と

云う三字是れなり。此の三字より之れを読み、分かれて両畔に向かう。朱画は淨妙の法を表し、墨画は垢染の法を表す。一一血脈を尋ねて之れを看よ。朱を此の号と為して、淨法十重の次を記し、墨を此の号と為して、染法十重の次を記す。此の号は是れ本論の文、此の点は是れ義説の論の文なり。（諸版ほぼ同文）

つまり、一目で、淨法の十重と染法の十重が判るよう考へ出した図だったのである。もともと、「淨染十重図」の原図は、朱色と墨色で書かれていたものであるが、本文の説明は残ったものの、図の朱色はあいまいなままに伝承されてきた。ところが、字井氏は、次のように指摘する。

田原本ハ『今単線引是朱是淨、双線引是墨是染』ヲ加フ、之ニヨリテ知ラルル如ク田原本ノ以下ノ図ハ全ク他ト異ナルモノナリ、又朝鮮本ノモ他ト異ナル、元禄本ノモ一種特別ナリ（前掲書一三六頁）

田原本は朱書を単線にて、墨書を双線にて示し、朝鮮本は此區別をも凡て捨てて居る。（同二一八〇頁）

すなわち、朱色が使えないから、やがて朝鮮本はこの區別を「捨てた」。だが、五山版（≡田原本）は一つの工夫を施し、朱色の部分を単線で、墨色の部分を双線で描いたのである。このようにすると、朱色は無くとも、朱色の部分と墨色の部分は明らかなる、五山版の最大の存在価値はここにあった。このことは、注意深く検討すると、実は驚くべきことに敦煌

本の写本には朱色が存在していたと考えられるのである。

もともと、「浄染十重図」は、鎌田氏本でいえば、五〇段から五二段の本文にあたる「仏と衆生、悟と迷との関係」と「迷いの過程―凡夫の相」と「悟りへの道」の三段の本文を図に表したものである。この五〇段から五二段の本文に関しては、三種類のテキストに大きな相違はない。

ところが、この相当箇所の本本文は大きな相違はないのに、「浄染十重図」となると相違する。明蔵本の図が白丸の符号の中に、黒い部分を印したりして、宗密の原文と相違することは事実である。^(補註)だが、本文の系統は、明蔵本と朝鮮本とは明らかに相違するが、朝鮮本と五山版とはそれほど大きな相違はなく、元来、同一系統といつてよい。とすると、果たして図だけが全く別のものといえるであろうか。また、朝鮮本の図はどのように理解すべきであろうか。

鎌田氏は、明蔵本と比較して、朝鮮本の「浄染十重図」の構造を概略し、「万曆本と明蔵本との図式の中でもっとも大きな相違点は覚の下の図式と、仏の三身の図式である。」(前掲書二五三頁)という。ここではその「覚」の下、より明確に言うならば「藏識」の下の図式のみを問題にしてみよう。

まず、朱色を捨てた朝鮮本の「浄染十重図」をどのようにとらえるべきであろうか。敦煌本を参考にすると、朝鮮本は朱色、墨色がないだけでなく、本来存在した図の線も省略

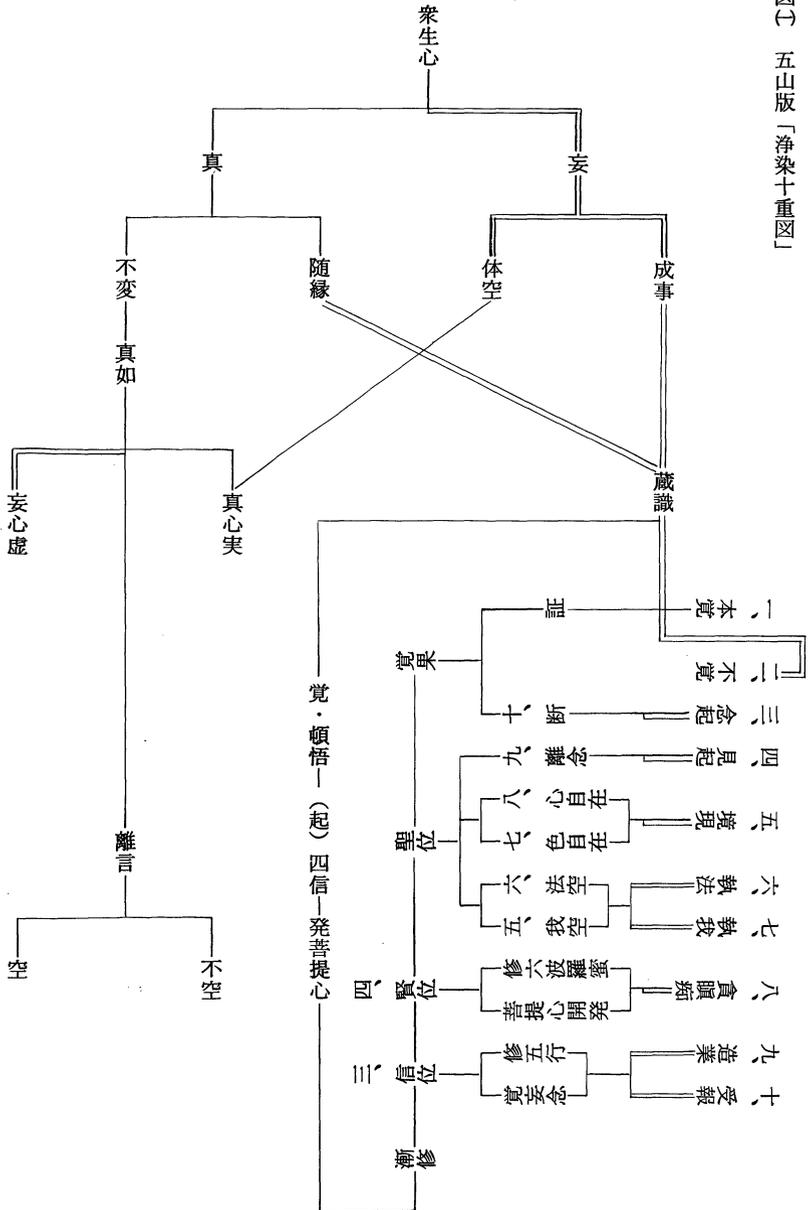
されたものと考えられる。さらに、朝鮮本の図を考えるには、本文が同一系統と考えられる五山版から見て、五山版の単線が朱色を表し、双線が墨色を表す図が参考になると思われる。

五山版の「浄染十重図」を、明蔵本や朝鮮本の見出し語をも参考にしながら略説すると、図(一)のようになろう。「真如」の下の「妄心虚」とは、単線で繋がれているが、双線がよいと思われるので改めた。また、浄染それぞれの十位までの番号は新たに付したものである。その場合、大英図書館本には書き入れがあるので、参考にした。

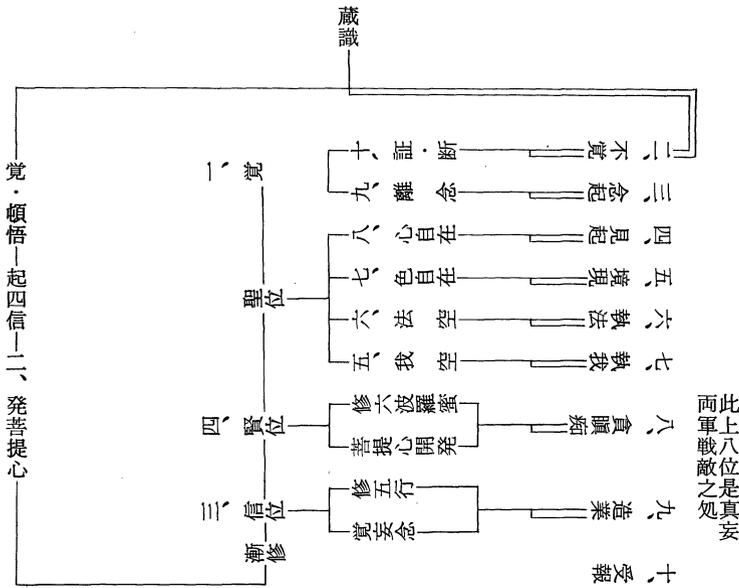
「藏識」の下の図を考える場合に注意すべき点は、鎌田本の五二段の迷いの十重と悟りの十重の関係の文である。その関係を宇井氏は二七九頁で、「悟迷の十重の関係」と呼んで図に示すが、鎌田氏の訳注にも、研究書にも、それは継承されている。だが、「浄染十重図」にそれが参考にされていない。

三本で特に問題になるのが、本覚の位置づけであるが、当然、墨色で結ばれた「本覚」は、ありえない。鎌田氏は、宇井氏が「止むを得ず」活字化するために覚と不覚の関係を図示せずに終わった図を継承したため、その覚と不覚の関係を復活されなかった。さらに明蔵本と同様に、「不覚」を開いて、「一」、「本」覚を「二、不覚」の上に位置づけたのであるが、その結果、頓悟漸修の最後の「一、覚」、五山版の「覚

図(一) 五山版「浄染十重図」



図(一) 朝鮮本「浄染十重図」の「蔵識」下



大英図書館所蔵の五山版『禅源諸詮集都序』について (石井)

果」の条項を省略することになった。朝鮮本の図には、右の最上段には、「二、不覚」とあり、それと対応する左の最上段には、明らかに「一、覚」とある。現存の朝鮮本の図には、覚と不覚の関係を示す朱色と墨色の線はないが、図中の文として存在する「此の上の八位は是れ真妄兩軍の戦敵の処」の意味は、先に述べた五二段の「迷悟の十重の關係」から理解すべきだと考えられる。つまり、迷いの十重の内の「二、不覚」から「九、造業」までの八位が、悟りの十重の「一、覚」から「三、信位」までと対応しながら関係していることを表している。「迷いの十重」と「悟りの十重」を別々に表せば、その関係は順序を逆にして対応していることになる。このことから、朝鮮本の「浄染十重図」の「蔵識」の下の図は、図(一)のように理解すべきであろう。ここでは、墨線を双線とした五山版に準じて「浄染十重図」に新たに線を加えて参考に供したい。

このように朝鮮本にも覚と不覚の関係が示されていたと読みとる必要がある。敦煌本を紹介した田中良昭氏は、鎌田氏の略図をそのまま継承したために、以上述べた点には言及してはいない。敦煌本の図は影印では見にくい、右の最上段は不覚であり、それに対応する部分も朝鮮本と同様であることは明確である。

以上、五山版が特殊な工夫によって、単線で朱色を表し、

双線で墨色を表したことが知られることによって、朝鮮本や敦煌本の「浄染十重図」が以前より読み取れたのではないかと思われる。そのことよって、逆に本文に忠実な図に改めようとした明藏本は、従来指摘されているほど、朝鮮本と構造的には異なるものではないのではないかと考えるが、詳しい比較は別の機会にしたい。

最後に残された課題としては、敦煌本の朱筆を影印版ではなくて実物で確認できれば、今回の推測がより正確になると思われるので、機会があれば是非とも台湾国立中央図書館において閲覧したいと考えている。

(補注) 武内義雄氏の『中国思想史』(もと『支那思想史』、岩波書店、一九三六年)では、『都序』の明藏本の図が北宋の周敦頤の「太極図」に影響を与えたとするが、この説が成立しないことは筆者も当然だと考えていた。この件について言及している論文に吾妻重二氏の「太極図の形式―儒仏道三教をめぐる再検討―」(『日本中国学会報』第四六集、一九九四年一〇月)、いあることを後に知った。その中には敦煌本の図の朱筆についても触れられているので参照されたい。

〈キーワード〉 『禪源諸詮集都序』、宗密、「浄染十重図」、五山版

(駒沢大学教授、文博)

掲載されなかった諸氏の発表題目②

和泉地方における浄土宗の展開―堺旭蓮社を中心に―

藤本顕通(大阪成蹊女子高校)

諸行本願義について

坂上雅翁(淑徳短期大学)

臨終の師

吉田 清(花園大学)

近世仏教と対キリシタン問題(五)

高神信也(大正大学大学院修了)

「決定往生三機行相」について

永井隆生(知恩院浄土宗学研究所)

「十二問答」の伝承について

小林清尚(知恩院浄土宗学研究所)

證空の関東遊化と親鸞

加藤義諦(総合研究大学院大学)

真宗における価値判断の基準について

尾寺孝文(龍谷大学)